

企業リスクマネジメント・ERMの現在

—時代の変革期に求められるERMに関する一考察—

株式会社リスク・ラボ 大森 勉

1. 研究の背景と目的

経営環境の顕著な変化として、事業環境の複雑化・不確実性の増大、新たなリスク要因の出現、などが大きなカテゴリーとなっている。特に、リスク特定（リスク情報把握）の質がリスクマネジメント全体の成否を左右することが判明している。本研究では、従来型リスク特定及び分析評価手法を整理、あらためてリスク特定（リスク情報把握）におけるシナリオベースアプローチの導入を検討する。さらに、AI・デジタル技術を活用したリスク予測手法を考察する。

2. これまでのリスク特定・分析・評価アプローチ

企業のリスクマネジメントシステムの設計と運用を実行する際には、IEC/ISO31010 リスクアセスメント技法が広く活用されて来た。リスク分析評価の基本軸として、①リスク顕在化時の影響度、②リスクの発生頻度の2軸が採用されているが、ランク付けの粗さ、リスク許容量の個人差、リスク顕在化スピードの未反映、リスク対策効果の未考慮、などの課題が問題となった。解決策として、③リスク顕在化速度、④リスク対策有効性を追加。4つの評価軸の採用が多く企業で確認されている。それでも、評価者スキルと評価バイアス、データ収集方法と定量化などの新たな課題が残っている。

3. シナリオベースアプローチ

IEC/ISO31010 は多くのリスク特定手法を提供している。本研究においては、リスクの本質およびリスクが有する相互関係性に注目する。リスクを縁起論的視点で捉え直し、「リスク原因に何が加わることで顕在化するのか」「もし～ならば、の思考に基づく仮想的状況を多面的に設定する」「リスク発生から影響波及までの連鎖を時系列で可視化する」「複合的・連鎖的リスクを可能な限り特定する」など複数視点でのシナリオベースアプローチをテーマとしている。

4. リスク予測アプローチフレームワーク

AI・デジタル技術を活用し、「初期設定されたリスクシナリオ」と「日常的に把握されるリスク情報」により、リスク予測アプローチフレームを検討する。音声記録を自然言語処理することでリスク情報の自動収集、次に共起ネットワーク分析により日常業務に潜むリスク情報の可視化を図り、意思決定の情報リソースとしての価値を考察する。

5. まとめ

現在、複数の企業リスクマネジメント活動を通じて実データを取得中であり、想定される効果と実装可能性を引続き検証する。